



【ヴォポアン】

◇使用木材  
表板/ジャーマンスプルース  
横/ローズウッド・メイプル リブ  
裏板/黒檀・メイプルリブ  
ネック/マホガニー  
(ローズウッド・メイプル リブ巻き)

◇塗装  
オイルフィニッシュ



TAKESHI SAITO

リユーティエ<sup>(※)</sup>  
齊藤 健さん

KEN弦楽器工房  
秋田市外旭川字三千刈61-6  
[http://www.geocities.jp/ken\\_g\\_koubou/](http://www.geocities.jp/ken_g_koubou/)

※リユーティエ=弦楽器職人

時を越える音

17世紀から現在まで、時を越えて技を受け継ぐ手作りギター。何百年も昔に生きた、職人たちの思いがよみがえる。



つややかな木目となめらかな曲線、ヘッドやサウンドホールに施された精細な装飾。齊藤さんが作るギターは、楽器でありながら息をのむほどに美しい。

レース編みを思わせる立体ロゼッタは主にバロックギターに用いられる装飾だ。素材は子牛の皮。カッターと穴開けのポンチで形づくり、組み立てる。ギター本体と立体ロゼッタ両方を一人で作る職人は、国内はもとより世界中でも数少ない。

「ギター作りは、100分の1ミリに左右されます。1本を仕上げるまでの約2カ月半、緊張の連続ですね」

手掛けるのは、17世紀初頭から18世紀半ばに生まれたバロックギター、作曲家家シニューベルトに代表される「ロマン派」が活躍した時代の19世紀ギター、現在クラシックギターと呼ばれるモダンギター、そしてウクレレ。独学で技術を身に付け、制作と修理を請け負っている。

中でも力を入れるのが、古い時代のギターの複製だ。「古楽器は資料が少ない。作り方も設計図もない。昔の職人の作品を写真や文献で調べ、技術をひも解きながら作っています。同じギターでも制作者が生きた時代や国によって形や装飾、音まで違うんです」。資料の大半は海外から取り寄せた洋書。言葉を調べて訳し、想像をめぐらせながら、古き時代の職人魂に一步一步近づいていく。

こだわりは、音。「見た目や装飾のまねで終わりがたくない。当時の職人はどんな音を求めていたのか再現したくて、多少使いづらくてもあえて当時のまま復元しています」

バロック時代から現在まで約400年。時を越え、国境を越えて、ものづくりにへの思いが音となって響き合う。